

Fate/Runner's Zero

再buster

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

思い付きで書いたFate/Zeroの二次創作ネタの予告から始まる物語。
真面目で礼儀正しい青年と妙に高圧的な女性によるちよつとおかしな聖杯戦争をど
うぞ。

目

次

I F の サーヴ アント

I F の サーヴ アント 2

こうして始まる物語

16 9 1

I F の サーヴ アント

古くから在る伝承、おとぎ話といったモノには時たま原書のモノとはまったく違う異なった記述が残つてたりするものである。

例えばシンデレラという物語だ。

最後には王様と幸せにくらしましたとよくある話だが、元々のエンディングでは繼母姉の目を鳩が引っこ抜くというとんでもないものであつた。

例えば浦島太郎だ。

最後はお爺さんになつたというのは同じだがその後がまつたく違う。

老人として暮らした、海に潜り自害した、鶴になつたと諸説ある。

こうした大半のモノは後世の人々が分かりやすいように書き換えたり、教育に悪いといつた理由で変わつたモノである。

他にも訳を書く際に解釈を間違えた、ということもあるのだろう。

指輪物語といった複数人の作者によつて書かれたモノがこれにあたる。

ならば古に伝説となつた英雄たちの生涯ならどうだろうか。

それこそはじまりは吟遊詩人の詩だ。

自身で見たり聞いたりした物語を詩にする事もあるだろう。
時にはその時代の権力者が自身に都合良くなるように語らせた詩もあつたに違ひない。

当時の物語はそんな彼らの趣味趣向で主人公の性格すら簡単に決められてしまう。
きっとあの人物はとても眞面目で汚い事の一つも知らないのだろう、とか――

きっとアーツは大悪党で、平気で村々を焼き女子供だらうと容赦無く殺す、とか――
きっとあの男は、卑怯な手を使つて敵を欺き勝利してきた弱虫だ、とか――

吟遊詩人が奏でれば人殺しすら英雄になるし、本物の英雄ですらただの罪人へと落と
される。

当時は彼らの語る詩こそが眞実であり事実だつたのだ。

ならば、現代に伝わつてゐる内容とはまつたく異なつてゐる英雄もいるかもしけな
い。

例えはアーサー王は実は女の子だつた。

例えはクーフーリーンはスカサハに会つていない。

例えばヘラクレスは十二の試練なんて達成していない。
などである。

結局、事実を知る方法など無い現代の我らでは、そういうたねじ曲がっているかもしれない物語を真実として受け取るしか無いのだ。

私たちにはどうあがいた所で、真実を知る術などありはしない——

そして、これから語るのは I F の話だ。

吟遊詩人はなにも一人しかいなかつた訳ではない。
そりやあ数多くの謡手がいただろう。

ならば、そんな中に正に狂言めいたことを語る者が一人は居ても可笑しくはない筈だ。

そう、そんな狂言めいた事を語る彼は、生前こんな事を語つていたという。

曰く―― 王は誰よりも早く戦場へと駆けつける――

曰く―― 王の剣の切つ先は誰にも見る事が叶わなかつた――

曰く―― 王の剣は如何なるモノも捻じ伏せる無敵の剣であつた――

曰く―― 王は湖の上を沈む事無く走り抜ける――

曰く―― 王は誰にも届かぬと云われた遙か遠き理想郷へとたどり着いた――

さて、今、語つた内容に可笑しな部分などあつただろうか？

大半の者は別に可笑しなところは無い。

これが正しくとある王の生き様だ。

そう思うことだろう。

だが、その吟遊詩人が語つた最後の言葉を聞けば、きっと誰しもが首を傾げる事になる。

そして此度の聖杯戦争は、そんな狂言めいた吟遊詩人によつて語られた、本来存在し

ない筈の英雄の物語。

「可笑しな話ですね、剣で斬っている筈なのに……聞こえてくるのは正しく剣と剣がぶつかり合う音なのですから」

彼の英雄は最優を誇るセイバーに正面から打ち勝ち――

「俺の眼でも追いつけないと……これでは最速のランサーの称号を返上するしかないか？」

彼の英雄は最速を誇るランサーよりもなお速く動き――

「この偽物風情が、 我の剣を避けるなど万死に値する!!」

彼の英雄は最強を誇るアーチャーの剣群すら回避してみせ――

「ううむ、大群を前にして一步も引かぬその気概、そして我が軍勢をも圧倒するその実力、欲しいなお主」

彼の英雄は最大を誇るライダーの軍勢を物ともせず――

「まさかアサシンの気配探知を抜けてここまで来たというのか!?」

彼の英雄は最多を誇るアサシンにすら気取られる事無く――

「アナタは!? アナタは一体なんなんですかっ!!?」

彼の英雄は最悪を誇るギャスターですら恐怖に陥れた――

吟遊詩人が語った最後の言葉、それは――

「彼の王は、ケンキヤクの持ち主だったのです」

バーサーカーではなく、イレギュラーとして召喚された英雄。

間違つた解釈によつて生み出された存在する事の無い架空の英雄。

I F によって作り上げられた現実を覆す希望の英雄。

最強最速を以つて戦う『無手』の騎士。

故に彼の称号は『騎士（セイバー）』ではなく『走者（ランナー）』。

騎士達の王にして『剣脚』の騎士、アルト・デュース・ウーサー・ペンドラゴン。

第四次聖杯戦争を駆け巡る！

I F の サーヴ アント 2

気にいらない――

アレを見た瞬間、自身の中にそんな怒りの感情が溢れていた。
ああ、思い出すだけで虫唾が走る。

黄金の鎧を身に纏い、如何にも自身が偉いのだと踏ん反り返り、他の者を平然と見下す。

惜しげも無く蔵にある武具を飛ばし、奪われれば汚い手で触るなど憤怒。
小娘に容赦の無い言葉を投げかけ、自身では愛でているなどとほざき。
簡単に主となつたモノを裏切り殺すし別の者へと易々と鞍替えする始末。
生き恥を晒してまで受肉を果たし地獄を眺めながらほくそ笑む……
あまつさえ子供の命を糧に十年もの長きに渡り生きながらえ……

……

■ ねよ消えろよ何故貴様のような奴が存在するふざけるな決して認めない!!!!!!

はあ……はあ……

ああ、分かりやすく单刀直入に言つてやろう。
アレが嫌いでしようがない。

■ んで欲しいと思うくらいに、この瞬間に世界の全てから消えて欲しいと思えるくらいに！

ああ、アレが半身同然のモノなど信じたくも無い。
何故アレと同じ存在などと認めなければならない？

何故アレがさも同然のように本物だなどと言つているのだ？

ああ、気に入らない——

この世の全ては我のモノだなどと言つておきながら、奴からは愛がひとかけらも感じられない。

アレはただ子供が駄々をこねているだけではないか。

世界は全部自分の物だと、ありもしない根拠を並べて、他人の者を力ずくで奪い取るだけのわがままな子供だ。

違うというならなんだその戦い方は？

持つてているモノを無造作に投げつけているだけではないか。

そんなものは子供が気に入らない相手におもちゃを投げつけているのと同じだ。

そこに愛なんてものはありはしない。

子供は未来の宝などとぬかすなら、なぜ貴様はそんな子供を糧に生きながらえる？

それこそ生き恥だろうに……

貴様は結局、始終自分が可愛いだけなのだよ。

そもそも、自身の所有を語るならまずは愛してみせよ！

全てを自身のモノとするなら等価に愛を見せてみせよ！

自ら放たれたそれはすべからく我が子同然だ。

ならばその手で触れてやり、絹を扱うように纖細に使い、そしてその身を案じてやれ。

それすら出来ずして何が王だ！！

興が乗つた？

ふざけるのも大概にしろよ小僧。

この世の全ては愛で溢れている。

ならば興が乗らないという言葉は出はしない。

慢心？

馬鹿か貴様は？

慢心してその身に纏う鎧に傷でも付けてみろ。

鎧が可哀想ではないか。

やはり貴様には愛が足らん。

全てを愛するというなら、その身に纏う羽織一枚とて傷など付けさせるな。

傷つくのはいつでも自身一人、この身一つで十分ではないか！

血を流すのはいつだって自分一人でいいではないか！

いくらわが身が傷つこうとも、我が子が無事ならそれでいい。

我が子が無事なら、いくらでも立つてやろうじゃないか！！

それこそ正しく愛ではないのか!?

ああ、だから奴は気に入らないのだ。

なあ、ギルガメツシユ……

我と同じ名を持つ小僧よ。

『私は全てを愛している』

ああ、愛してやるさ!

何故なら私は万物全てへの愛で出来ているのだから!!

『私は全てを抱きしめる』

ああ、抱きしめてやろう！

何故ならば世界の全てが心より愛おしくて堪らないのだから!!

そしてギルガメッシュよ。

もし貴様が、我が伴侣を笑うというのであれば――

「私は全力で貴様をなぶり殺しにするぞ？」

第四次聖杯戦争に、愛の王が参戦する。

こうして始まる物語

その日、間桐の家に雷が落ちた――
いや物理的に落ちたとかじやなくてどえらいお怒りをかつてしまつたとかそんな感じの方だ。

しかも彼らにとつて人生初と言つてもいい程のそれはそれは大きな雷だつたという。

そもそもその発端は間桐雁夜が臓硯の命令でサーヴァントを召喚した事にある。
臓硯が聖杯戦争に参加させるにあたつて予め用意して媒介はアーサー王の盟友にして円卓の騎士の一人であり同時に裏切りの騎士の異名を持つ、『湖の騎士』サー・ランスロットのモノ。

もちろん、召喚されるのは彼以外にはありえなかつた。

もし正しく召喚が成功していたならば、今彼らの前には漆黒の鎧を身に纏つたバーサーカーとして存在していた事だろう。

だがそうはならなかつた。

天の悪戯か、はたまた運命の巡り会わせか……
単純に作者の嫌がらせか。

召喚されたのは二人の男女だつたのだ。

この時点で既にありえない事が起きてしまつてゐる。

男の方は、金色の髪に洗練された顔つきをしてゐる。

歳は二十くらいだろうか、見た目よりも若い印象を受ける。

軽装。

腰周りと両脚を覆うように存在する銀のプレート。上半身は籠手くらいで装備らしきモノは無し。

しかも剣や槍などの獲物を持つていない。

セイバーかランサーかすら分からぬ謎の男。

女は、男と同じく金色の髪で腰まで届くほどに長く美しい。

顔もまるで芸術品のようであり完成されている。彼女以上の女性などいるのかと疑

間に思えるほどにだ。

歳のほうは二十歳手前くらいで若さを感じるがそれ以上に威圧感や凄みというモノが半端無い。

なんか直視するのが戸惑われてしまうほどにだ。

装備はこちらも軽装であり、赤の衣に金色の鎧。

両腕の籠手とスカートのような形状の鎧に両脚の装備くらいだろう。
そしてこちらも獲物は見当たらない。

一体この二人は何のサーヴァントなのか……

いやそれ以前に、

「馬鹿な……一騎を同時に召喚したとでもいうのか？」

あの雁夜が？」

これにはあの臓硯も目を見開くしかなかつた。

才能のかけらも無い、使い捨ての急ごしらえの魔術師が前代未聞の召喚をなしえたの
だからそれは驚いて当然だろう。

当の本人である雁夜も何が起こっているのか理解出来ていない。

そもそも一騎でさえ魔力を維持するのは大変だというのに二騎同時召喚だ。

普通であれば既に意識を渾沌させているか魔力が枯渇して死亡していくても可笑しく

は無い筈なのに……

雁夜は多少の体力低下は感じているもののこうして普通に立っている。全てが前代未聞だった。

すると男の方が口を開いた。

「私たちは貴方によつて召喚されました。
さあ、願いを……私たちは貴方の願いを叶えるべく、召喚されたのですから」
「！」

狂つていない。

本来バーサーカーであれば口を利くことすら出来るほどの理性も残つていらない筈だ。だがこの男は自然に話をした。

バーサーカーであればありえないことだ。

狂化されていないとなればバーサーカーでは無かつたという事。
ならば……

「まつたくもつて貴様等には愛が足らん!!」

その瞬間、男の傍らに立っていた女が口を開いた。

館中に響き渡るほどの声。

聞いた瞬間に跪きたくなる程の威圧感を持つたその声に、臓硯も雁夜もその場で動けなくなってしまう。

「そこの翁！ そしてマスター権限を持つ貴様もだ！」

「そこに直れ！ 膝を付け!! つまり正座!! さつさとしろ!! 三秒以内だ!!」

「ぬおつ!?」

「うわっ!!」

言われたがままに無理やりに彼女の眼前で正座をしてしまう二人。

有無も言わさず命令に逆らう事すら出来ずに二人はいとも簡単に正座してしまった。

これではどちらが主か分かつたものではない。

「これから貴様等にはたっぷりと説教してくれるわ!!

愛を学ぶまで説教は終わらんからそのつもりでな!!」

「なんじやと!!」

「ちよつ!!」

さあさあこれから楽しい説教タイムである。

先ほどの命令によりまつたくその場から動くことも出来ない二人は最早逃げる事すら叶わない。

「ああ、アルトよ。

その間に桜という少女の方を頼む。

多分そこらへんの虫の海の中に居るであろうから見つけておいてくれ」

「分かったよ」

「さあ虫達も手伝つてやつてくれ」

すると影の中に潜んでいた虫の大群が一斉にワサワサと動き出した。

規則正しく動き桜の場所へと誘導していく。

「な!? ワシの虫達が命令を聞いているじゃと?」

「あれくらいは当然だ。なにせ我が愛しているのだからな!」

本来その虫たちは臓硯の命令しか聞くことは無い。

というか臓硯の半身と言つていい筈の虫達がただの一声で命令を聞くなどある筈がないというのに。

だが現実では虫たちは部屋の隅にある穴へと男を誘導し、穴に居た虫達は中から桜をゆっくりと運び出している。

「あ、桜ちゃんを見つけたよ。ちょっと衰弱してるね」

「それはいかん! 我の宝物庫から栄養剤を出さねば……あと毛布に食事もいるな。

ああそんなに汚れて!! お風呂にも居れてやらねば!!」

「それは僕がやつておくよ。君は説教があるんでしょ？」

「当然だ！ そこを分かつてくれるアルトはさすがは我の旦那様だな愛しておるぞ！！
ダーリン!!」

「はは、ありがとう。じゃあ桜ちゃん行くよ～」

桜を抱きかかえてアルトと呼ばれた男は地下から出て行く。

それを見届けて女の方は再び正座する二人の方へと向き直った。

その時の彼女の表情は、それはイイ笑顔だつたと後の雁夜は語っている。

「では私は説教タイムだ！ なに、眠くなつたら貴様らの中の虫を使つて無理矢理にでも叩き起こしてやるから安心しろ！」

「何も安心できないんだが……」

「なぜお主はワシの虫をそこまで操れるんじや？

今もこうして動けぬでいるし」

「我的溢れる愛情とカリスマのおかげだな。

ん？ 我に椅子はいるかだと？ なあに、説教をするのであれば我にそのようなモノ
は必要ない！

「我が説教は愛であると知れ!! 立ちつかれたなどとほざく氣は毛頭無い故にな!!
だがその心遣いは感謝するぞお前たち」

女の隣にいつの間にか居た虫達はどこからか椅子を持つて来ており、彼女に座るよう
に勧めていたらしい。

何を言つているかすらというか表情も意識も何も分かつたもんじやない筈なのにこ
の女はさも当然のように虫と会話している。

愛があるからなどという理由で納得出来るモノではなかつた。

「……なんか爺よりも言う事を聞いているような」

「ワシの虫なのに……」

気が付けば虫達は正座する二人の周囲に集まつており、まるでこれから彼女の説教を
一緒に聞くかのように彼女の方を見ていた。

「よろしい！　さあ、説教タイムじやお前ら!!」

こうして間桐の長い夜ははじまつたのである。

「貴様は子供をなんだと思つておるのだ!?

子供とは人類の至宝、人類の未来そのものなのだぞ!?

それを私利私欲のために道具のように扱いおつてなんと嘆かわしい！

子供は育み慈しむモノであると何故に分からぬのか!!」

「魔術師の悲願がなんじや！」

そんなもんのために誰かを犠牲にするなど言語道断!!

やるなら一人でやれ！ 他人を巻き込んで悲願だなどと恥じと知れ!!」

「貴様もかつては自身の力で願いを勝ち取ろうとした者の一人なのだろう？」

ならば何故自身の願いを忘れた!?

その願いは、夢は！ その程度のモノでしかなかつたという事か!!

貴様の悲願というモノはたかだか数百年で摩耗する程度のモノなのか!!」

「貴様も貴様だ!!」

少女を救いたい……その想いは確かに正しく、まさに愛だと我が断言しよう！
だが!!

その果てに自分を投げ出すのは許されざるべき事だ!!

貴様が死んでは彼女があまりにも可哀想だとは思わんのか!!

自分も救われてこそその救いであると教えてくれる!!」

「恨みだと!!

ああ、確かに自身の子を魔術ごときのために外に出すなどと許されるべき事ではな

いのは当然だ!!

これに関しては我也同感と言おう、むしろ我も殴つてやらねば気が済まぬ。

だがこれとそれは話が違う！

貴様はかつて恋した女を取られたという恨みをもつて復讐をしたいというあまりに私欲な考えで動いておる！

それでは愛が無いではないか！！

愛があるなら！ 恨みある男であろうと正してみせよ！！

魔術など関係ない！ 一人の親であるなら！ 子は須らく愛してみせよと！ 子を手放すは愚かな事であると!!」

「そしてこの聖杯戦争だ！」

何も知らぬ者を巻き込み自身の願いを叶えようだなどと馬鹿か貴様等は!!

誰がこんな馬鹿げた事を考えおつたのか……

何？ 貴様がその一人だと？

そこに直れ!! 貴様には一から説教をしなおしてくれるわっ!!!

そもそも人と言うのは!!」

説教が終わつた頃、日が昇り始めていた――